「ヨハネについて」　　2025 年 11 月 14 日

新約聖書には「ヨハネ」という名の人物、また、ヨハネと名のついた文書が 5 個ある。聖書に出てくる順番に、ヨハネについて、整理して書いてみたい。

① 「洗礼者ヨハネ」は、祭司ザカリアと妻エリサベト夫婦の晩年に生まれ、エルサレム神殿の祭司となるべき人であったが、神殿を去り、荒れ野に立ち、民衆に激しく悔い改めを迫り、ヨルダン川で洗礼を授ける運動を始めた。彼の説教と生き方に感動し、多くの人々が洗礼を受け、大宗教運動となった。彼は主イエスにも洗礼を授け、天から聖霊が降るのを見、「私の愛する子、私の心に適う者」という声を聞き、主イエスを救い主（メシア）であると、人々に証しした。メシアを指さす旧約聖書最後の預言者に位置する人である。

② 「主イエスの愛弟子ヨハネ」は、漁師ゼベダイの息子であるヤコブとヨハネ兄弟の弟である。兄弟は主イエスの弟子であることを誇り、従わない者を激しく排除したり、主イエスが王になった時は、高い地位を要求する野心家であった。しかし、主イエスはヨハネをいつも傍に置き、特別に愛した。ヨハネは主イエスの息遣いから愛を深く受け止め、愛の人へと成長した。十字架で苦しむ主イエスから母マリアを託されている。伝説では、長寿を全うし、晩年まで、主イエスの愛を語る伝道者として活躍した。

③ 「ヨハネ福音書の著者ヨハネ」は、主イエスの愛弟子ヨハネであるかのように書かれているが、時代背景が全く違う。著者ヨハネはどんな人かは分かっていないが、ヨハネ教団に属する優れた知識人であろう。キリスト者がユダヤ教徒から「会堂追放」された時代に、キリストは世の初めから先在する神の子であると、キリスト信仰の確かさを伝えようと、共観福音書（マルコ、マタイ、ルカ）とは視点を変え、ヨハネ福音書を書いた。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」と、格調高いロゴス・キリスト論を展開し、高度なキリスト論を弁証した神学者である。

④ 「ヨハネの手紙一の著者ヨハネ」も、誰であるか分かっていない。ヨハネ福音書に類似した言葉を多く用いているが、ヨハネ福音書と時代背景が違う。ヨハネ福音書は「会堂追放」の迫害を背景にしているのに対し、ヨハネの手紙一は、主イエスの人性を否定し、抽象化した二元論に走った「仮現説・グノーシス主義」を背景にしている。教会の中に、思弁的な神学が台頭してきたので、著者は、主イエスは実在し、目で見、手で触られる方であると説き、愛は相手に届く具体的なものであると主張している。

⑤ 「ヨハネの手紙二と三の著者ヨハネ」は、「長老の私から」と書かれているので、「長老ヨハネ」と言われている。二と三の著者は同一人物で、ヨハネの手紙一の著者と類似点はあるが、違う人のようである。彼らは共に「ヨハネ教団」の指導者たちであろう。長老ヨハネは、長老の立場から、教会員を諭し、殊に、正統と異端の判断基準を述べている。

⑥ 「ヨハネ黙示録の著者ヨハネ」は、1 章 9 節で「私は、あなたがたの兄弟であり、共にイエスの苦難と御国と忍耐とにあずかっているヨハネである。私は、神の言葉とイエスの証しゆえに、パトモスと呼ばれる島にいた」と書いている。キリスト教が迫害された時代、パトモス島に逃れ、そこから諸教会に、迫害に耐え信仰を貫き通そうと励ましの手紙を送った人である。天変地異、神秘的な幻などによって著わす黙示文学的表現で、キリストの勝利を告げ、キリストの再臨を待ち望む信仰に生きるように訴えている。

ヨハネと書かれた人が 6 人もいる。彼らは置かれた時代の中で、キリストを証しし、従い、また、キリストの福音を懸命に書き残した。彼らの労苦に心から感謝したい。